

ほめの応答に用いられる「いや」の機能および後続展開

— 日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較 —

彭津（東京外国語大学大学院生）

要 旨

本稿ではほめの応答に用いられる「いや」の機能および後続展開について、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』と『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』を使用し、談話・相互行為レベルで日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較分析を行った。結果、ほめの応答に出現する「いや」の機能は、ほめに対して抵抗を示したりほめと距離を置いたりすることであり、「いや」に続く発話によって応答が否定や回避、肯定、それらの複合となることが明らかになった。また、ほめに対する応答が産出されたあとの受け手主導の後続展開は、「語りの開始」「先行語りの継続」「情報要求」「情報提供」「話題転換」に分類できた。母語話者は様々な方法で後続話題を展開し、特に先行した応答と関連する「語りの開始」が多かったのに対し、学習者はほめ談話の内容と関連する「情報提供」が多かった。これらに基づき「いや」による多様な応答方略と後続展開方略の指導策を提案した。

【キーワード】「いや」 ほめ－応答連鎖 機能 後続展開 中国人日本語学習者

1. はじめに

日常会話において、「いや」は質問に対する否定を表すことばだと認識されている。これまでの「いや」に関する研究では、主に「質問－応答連鎖」に主眼が置かれ、「いや」は物事を否定する以外に、質問に対する明確な諾否の回答を示さずにぼかすもの（山根 2003）や、先行質問の「ありうる展開」をブロックするもの（串田 2005）など、否定以外の多様な機能があることが指摘されている。しかし、「いや」は「質問－応答連鎖」だけでなく、「ほめ－応答連鎖」でもよく見られるが、ほめの応答位置における機能と使用特徴はまだ不明である。それらを明らかにするために、ほめ手がどのようなほめ行為を行い、受け手は「いや」を用いてどのような応答を遂行し、さらにそれに後続する話題がどのように展開しているかといった会話の一連のやり取りについて、会話参加者たちの相互行為を質的に分析する必要がある。

従来のほめに対する応答の研究では、日本語学の研究や対照研究にとどまるものが多く、接触場面における学習者によるほめの応答に関しては十分な分析がなされていない。日本語教育現場において、謙遜の文化が紹介されている中で、「いや」が典型

的な標識の1つとして学習者に紹介されることもある。しかし、文化と言語を短絡的に結び付けて説明することは、学習者の言語習得の過程でステレオタイプを植え付けることにつながりかねない。また、実際はほめに対する応答が産出されたあと、常にほめ手は再ほめを行ったりして話題を展開するわけではなく、会話参加者間に長い沈黙が生じたり、話題が滞ったりすることもよく見られる。その場合、ほめの受け手が主導権を保ちつつ、先行した応答と関連付けつつ能動的に後続の話題を展開することは、学習者の談話展開能力の育成に密接に関わっていると考えられる。

以上より、本稿では、「ほめ－応答連鎖」に焦点を当て、ほめの応答に用いられる「いや」の機能およびその後続展開について、ほめ手と受け手の相互のやり取りを質的に分析し、談話・相互行為レベルで日本語母語場面と日中接触場面との比較を行う。これにより、日本語母語話者と中国人日本語学習者の特徴の異同を明らかにし、日本語教育でどのような指導策がとれるかを検討する。

2. 先行研究と本稿の位置づけ

2.1 「いや」に関する先行研究

「いや」の機能に関する研究では、「質問－応答連鎖」に着目するものが多い。例えば、山根（2003）は、質問に対する応答に使われる「いや」の典型的な用法は、諸否疑問文、確認要求的疑問文、イントネーション疑問文の応答の冒頭に使用される「否定」であるとしている。串田（2005）では、yes/no 質問文に対する「いや」は、先行する発話が予示する「ありうる展開」をブロックする働きを持つと指摘している。それを踏まえ、串田・林（2015）では、WH 質問への返答冒頭位置で「いや」が用いられることで、WH 質問に対して何らかの抵抗を示しつつ返答することができると主張している。また、「いや」の使用実態に関する研究には彭（2023）が挙げられる。彭（2023）は、日本語母語話者と中国人日本語学習者ともに、「いや」を「質問の含意や前提への抵抗」＞「質問への否定応答」の順で用いているが、その次に、母語話者は「ほめへの応答」に用いているのに対し、学習者の使用頻度がかなり少ないと論じている。以上より、「いや」の機能は「質問－応答連鎖」において議論するものがほとんどであり、母語場面で「いや」が出現しやすい「ほめ－応答連鎖」についての研究がまだ少ないと言える。次節では、ほめの応答に関する先行研究を概観する。

2.2 ほめの応答に関する先行研究

ほめの応答に関する研究は、母語場면을対象としたものや多言語の対照研究が多い。まず、Pomerantz（1978）では、受け手はほめに応答する際に、同意するか自画自賛を回避するかというジレンマに直面することを指摘しており、そのジレンマを解決する戦略として「ほめの格下げ」と「ほめの対象のずらし」を挙げている。これを踏まえ、張（2014）では、聞き手が自画自賛のジレンマを回避するために、話し手

によってなされたポジティブな評価の焦点を別の側面にずらして応答するというジレンマを解決する戦略を追加している。金(2012)は、ほめに対する応答を「肯定・回避・否定・複合」の4つに分類し、日韓対照分析を行った結果、日韓ともに「回避」や「複合」が多用されており、日本語にはその次に「否定」、韓国語には「肯定」が多いと指摘している。さらに、昂(2022)ではほめの応答の特徴について日中対照分析を行った結果、日本語ではほめを肯定する傾向にあると同時に控えめに応答する側面もある一方、中国語では積極的に同意を示すと論じている。一方で、ほめの応答方略に関する日本語学習者の研究は、池田(2008)や永田(2016)などが挙げられる。池田(2008)によると、日本語母語話者との会話において、国籍に関わらず日本語学習者は日本語母語話者のように否定の返答をしようとしたり、日本語母語話者の誤解を招かないよう配慮したりしているという。永田(2016)は、日本語母語話者からのほめに対して直後のトピックで相手をほめ返す「ほめの交替」を行うことが中国人上級日本語学習者には少なく、また会話の場に存在しない第三者を相互にほめるという「ほめの交替」を行うようなことも中国人上級学習者には見られないと論じている。

そして、ほめに対する応答の後続展開について言及した研究には、金(2012)、高宮(2022)、趙(2023)が挙げられる。金(2012)では、ほめの談話を「先行連鎖」(「本連鎖」の前に、ほめと何らかの関連のある実質的発話から始まるやり取り)、「本連鎖」(ほめの談話の中に現れた最初の「ほめ-応答」のやり取り)、「後続連鎖」(「本連鎖」の後に、実質的発話から始まるやり取り)で構成されているとしている¹⁾。また、高宮(2022)では、ほめに応答した後のやり取りを精査した結果、ほめられた側は①ほめられた直後にはほめを回避するが、その後受け入れる、②ほめられた直後にはほめを受け入れるが、その後回避するという2つの戦略を用いている。趙(2023)では、ほめが否定されたあと、ほめ手がどのような行動を取るのかについて考察した結果、ほめ側が「関連情報の確認」と「ほめる根拠の追加」を行うことで、ほめられ側とほめ側両者のフェイスに配慮を示しつつ、自らが直面する「ほめ側のジレンマ」に対処するとしている。ただし、ほめに対する何かしらの応答がされたあと、受け手はどのように先行応答と関連付けながら後続の話題を展開しているのかについては研究の余地があると考えられる。

2.3 本稿の位置づけ

上記の先行研究を検討すると、残された問題点は3つ挙げられる。1点目に、ほめに対する応答に用いられる「いや」は、会話の文脈によって機能が異なるため、一概に否定的応答に分類できない。故に、ほめの応答に頻出する「いや」の機能について、会話参加者たちの相互行為を考察する必要がある。2点目に、ほめに対する「いや」で始まる応答について、日本語母語話者と比較しつつ、日中接触場面における学習者の使用特徴を明らかにする研究の蓄積はまだ少ないため、より詳細に分析する必要がある。

ある。3点目に、ほめの受け手が「いや」で始まる応答を産出したあとで、どのように先行する応答に関連付けて後続の話題を展開するかも考察する必要がある。

そこで、本稿では以下の研究課題を設定し、コーパスの会話データを使用し、談話・相互行為レベルで日本語母語話者（以下、母語話者）と中国人日本語学習者（以下、学習者）の比較分析を行う。

課題①：ほめの応答に用いられる「いや」はどのように機能するか、「いや」で始まる応答にはどのような使用特徴が見られるか。

課題②：ほめの受け手は「いや」で応答したあと、どのように主導権を保ちつつ後続の話題を展開しているか。

3. 研究方法

本稿では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』（宇佐美 2023、以下、「BTSJ」）に収録された日本語母語場面と日中接触場面の雑談会話（両場面の初対面と友人同士各15組）各30組の合計60会話、および『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（以下、「I-JAS」）²⁾における対話タスクから抽出した母語話者50名分及び日本国内教室環境と自然習得環境における中国人日本語学習者73名分による会話を分析資料とした。

本稿で扱うほめの定義は、趙（2023）を参考に「話し手が聞き手自身（外見、年齢、能力、知識、思考、経験、趣味など）あるいは聞き手の家族やそれに類するもの（親族友人、所有物、居住地、所属機関など）に関して“良い”と認める様々なものに対して、聞き手を心地よくさせようとすることを前提に、明示的あるいは暗示的に、肯定的な評価を与える行為」とする。分析手順として、まず、「BTSJ」では手作業でキーワードを「いや」「や」と設定して検索を行い、該当した事例を抽出した。「I-JAS」では「中納言」の短単位・語彙素読みを「イヤ」とし、条件を追加して品詞の大分類を「感動詞」とし、該当した事例を抽出した。次に、抽出された事例を対象に、ほめに対する「いや」で始まる応答の特徴について、上位分類（否定型・回避型・肯定型・複合型）は金（2012）に従い、下位分類は昂（2022）を参考に、本研究データに見られた分類のみを表1にまとめた。後続展開の特徴については、金（2012）による「受け手」主導の下位分類（情報提供・話題転換）に、本稿で新たに見出された3分類（語りの開始・先行語りの継続・情報要求）を追加し、表2にまとめた。これらに基づき、ほめ手はどのようなほめ行為を行い、ほめの受け手は「いや」を用いてどのような応答を産出し、さらにそれに後続する話題はどのように展開しているか、という会話参加者間の一連のやり取りについて、談話・相互行為レベルで母語話者と学習者の比較分析を行う。

表1 ほめへの「いや」で始まる応答型（金（2012） 昂（2022）を参考に筆者作成）

応答型（定義）	下位分類	例 ³⁾
否定型 （ほめを明確に否定するもの）	不同意	A：すごい！ B：いやいや/いや全然
	控えめな不同意	A：留学を経験してることは強みじゃない？ B：いやー/いやーあんまりー
	否定的評価・説明	A：さすが先輩 B：いやいや年食ってるだけで
回避型 （ほめを肯定するか否定するかが明確に言語化されていないもの）	焦点ずらし	A：S 大学いいですよ。その付近何でもあるんじゃない？ B：いやでも学生が東武、西武はそんな使わないと思いますけどね
	客観的評価・説明	A：英語だったら余裕でしょ？ B：いや帰国生のクラス入っちゃったから
	態度の保留	A：[地名S] いいところ、おしやれ B：いやどうですかね/いやわからん
	無応答	A：豪快なお父様ですね B：いやでこの前さ…
	ほめ返し	A：東京出身の人に会うといいなーって思う B：いや逆に地方出身の人に憧れてる
肯定型 （ほめを明確に受け入れるもの）	同意	A：目がきらきらしてる B：いやーありがとう
	控えめな同意	A：あたしあれ知らなかった。初めて聞いた B：いやこれはちょっと難しい
	肯定的評価・説明	A：パーティそんなに大勢だった？すごい B：いや私大学の時友達いっぱいだから
複合型 ⁴⁾ （上記応答型のいずれかの組み合わせ）	否定型→回避型	A：へーすごいですよね B：いやいや。え、X先生もうお辞めになるんですか？
	否定型→肯定型	A：すごい希望に満ち溢れてる感じがした B：いやいや。あでもそれよく言われる
	回避型→否定型	A：素敵ですねー B：いやーどうでしょういやー全然
	肯定型→回避型	A：自分で企画を出した？すごいー B：いやまあそうですねー。でもみんなただチケットが欲しいだけって感じですね

表2 受け手主導の後続展開（金（2012）を参考に筆者作成）

受け手主導の後続展開	定義	例
語りの開始	受け手はほめに応答してから、自己卑下したり説明したりして、語りを開始する。	4.2節の例6参照
先行語りの継続	受け手は語りを話す途中でほめ手にはめられ、ほめに応答してから、中断された先行語りを継続する。	A：（父親に関する語り） B：豪快なお父様ですね A：いやであーと思って… A：（先行語りの継続）
情報要求	受け手はほめに応答してから、ほめ手に対して情報を要求したり、同意や確認を求めたりする。	A：私「学科名3」なんだよ B：おもしろそー A：やでも英語も話せないけど「言語名2」なんてもっと話せないから A：あ「言語名2」はよく分かんないけど、どう？
情報提供	受け手はほめに応答してから、それに関連する情報を提供する。	4.2節の例7参照
話題転換	受け手はほめに応答してから、話題を転換する。	4.2節の例8参照

4. 結果と考察

本章では、分析した結果と考察について述べる。課題①についての考察結果は4.1節で示し、課題②についての考察結果は4.2節で示す。

4.1 ほめに対する「いや」で始まる応答

本会話データに見られたほめに対する「いや」で始まる応答の集計結果を表3に示した。表3の合計を見ると、母語話者によるほめに対する「いや」で始まる応答の出現数は63件（総発話数⁵⁾の0.33%）、学習者は18件（総発話数の0.20%）であり、母語話者は学習者より使用が比較的多いと言える。また、母語話者が最も多用した否定型（27件）と回避型（25件）はほぼ同数であり、複合型（9件）、肯定型（2件）と続いた。一方、学習者では、否定型の使用が最も多く（8件）、次いで回避型（4件）、肯定型と複合型の使用が同数（3件）であった。また、「いや」で始まる各応答型の下位分類を見ると、否定型では、両話者ともに「不同意」の使用が一番多かった。回避型では、母語話者は「客観的評価・説明」（10件）、「焦点ずらし」（6件）、「態度の保留」（6件）の使用が多かったが、学習者による使用数はわずか4件だったため特徴を捉えることは難しい。肯定型では、両話者ともに「控えめな同意」と「肯定的評価・説明」の使用は見られたが、「同意」の使用は見られなかった。「複合型」の下位分類では、母語話者は「否定→回避」の使用が最も多かった（8件）。この結果から、母語話者は「いや」を用いた多様な応答方略でほめに応答しているが、学習者は「いや」による不同意以外の応答方略の使用は少なかったと言える。

次に、ほめの応答に用いられる「いや」の機能と使用特徴について、「否定型」において、母語話者と学習者ともに最も使用される「不同意」（例1）、「回避型」において、母語話者に多用され、学習者にも使用が見られた「客観的評価・説明」（例2）と「焦点ずらし」（例3）、「肯定型」において、両話者ともに使用が見られた「控え

表3 ほめに対する「いや」で始まる応答の集計結果

応答型		母語話者（％）		学習者（％）	
否定型	不同意	19（30.2％）	27 （42.9％）	7（38.9％）	8 （44.4％）
	控えめな不同意	4（6.3％）		1（5.6％）	
	否定的評価・説明	4（6.3％）		-	
回避型	焦点ずらし	6（9.5％）	25 （39.7％）	1（5.6％）	4 （22.2％）
	客観的評価・説明	10（15.9％）		2（11.1％）	
	態度の保留	6（9.5％）		-	
	無応答	1（1.6％）		-	
	ほめ返し	2（3.2％）		1（5.6％）	
肯定型	同意	-	2 （3.2％）	-	3 （16.7％）
	控えめな同意	1（1.6％）		2（11.1％）	
	肯定的評価・説明	1（1.6％）		1（5.6％）	
複合型	否定→回避	8（12.7％）	9 （14.3％）	1（5.6％）	3 （16.7％）
	否定→肯定	-		1（5.6％）	
	回避→否定	1（1.6％）		-	
	肯定→回避	-		1（5.6％）	
合計		63（100.0％）		18（100.0％）	

めな同意」(例4)と「肯定的評価・説明」(例5)の例を挙げながら分析を行う。

①否定型

例1 学習者による「不同意」(「BTSJ-424-27」)

52	JF205	んー、なんか、《沈黙1秒》結構日本に来て長いんですか？。
53	CMA001	うーん、こ、まー、今年5年目ですか<らー、まー>{<}。
54	JF205	<あ、結構>{>}長いんですね=。
55	JF205	=日本語、上手<ですもんね、えへへ<軽い笑い>>{<}。
56	CMA001	<いやいや、そんなこと>{>}ないです。

母語話者JF205が52行目で学習者CMA001に向けて「結構日本に来て長いんですか？」と質問し、学習者が53行目で「今年5年目ですから」と応答している。その次に、JF205が54行目で「結構長いですね」と評価してから、55行目で「日本語、上手ですもんね」と、CMA001の日本語能力をほめている。それに対し、CMA001が「いやいや、そんなことないです」(56行目)とほめを否定し、謙遜を表出している。これはほめに対して謙遜を表すいわゆる定型パターンだと考えられる。

「いや」による「否定型」では、母語話者と学習者ともに、連続使用「いやいやいや」や、「全然」「本当に」などの程度強調副詞との共起、否定形式の使用(例えば、「若いよね」に対して「いや若くない」)、自己卑下の発話などが多く見られた。これらを通して、受け手はほめに強く否定しているスタンスを表示していると言える。また、学習者の発話には「いやいやそんなことないです」といった定型パターンの使用が何例も見られたが、母語話者にはあまりなかったため、学習者は教科書の影響を受けている可能性がある⁶⁾と考えられる。

②回避型

例2 学習者による「客観的評価・説明」(「BTSJ-325-22」)

416	JF177	干支は一緒？。
417	JF177	中国も干支が、ある？。
418	CFA007	一緒。
419	CFA007	ただ、あの一、中国は豚、豚。
420	JF177	いのししがぶた？。
421	CFA007	そうそうそう。
422	CFA007	<ここだけ違う>{<}。
423	JF177	<あ、そうなんだ>{>}。
424	JF177	そうなんだ、へえー、面白い、<知らなかったよ>{<}。
425	CFA007	<や、でも最初>{>}、中国から、日本に。
426	JF177	うん。
427	CFA007	<最初中国から韓国に>{<}、
中略(CFA007のことは探しの発話)		
433	CFA007	韓国に最初に何か伝えて??(うん)、韓国また日本に、そういう、ルートで。
434	JF177	あそうなんだ。
435	CFA007	だから一緒だよ。

学習者CFA007が419行目から422行目まで「日本と中国の干支の相違」について説明している。母語話者JF177が424行目で「へえー、面白い、知らなかったよ」と、自分が相対的に知識を持たない「干支」に関するCFA007の説明が面白かったという意味でCFA007の知識状態をほめている。それに対しCFA007がまず応答の冒頭で「や」を置きつつ直後に「でも」を共起させ「最初中国から韓国に、韓国から日本に伝える」ルートを詳しく語っている。さらに435行目で「だから」を使用し説明の行為を明示している。ここで注目したいのは、CFA007の「いや」で始まる応答は、直前のほめへの反応ではなく、先行話題「中国と日本の干支が一緒」への説明だと考えられる。つまり、CFA007は「いや」を用いてほめ行為を受け入れない姿勢を示しつつ直後に標識「でも」を共起させ先行話題を再開し、それに関する説明を行う形で自画自賛に聞こえる可能性を巧みに回避していると言える。次にもう一つの回避型の例を見てみる。

例3 母語話者による「焦点ずらし」(「BTSJ-380-26」)

334	JF205	《沈黙1秒》でもなんか、《少し間》「大学名1」とかだいいいですよね。
335	JF205	「地名1」だからもう、なんでも(まー)、<軽く笑いながら>あるじゃないですか? [↓]。
336	JM061	そうですね(はい)。
中略(JF205によるほめの内容に同調するJM061の発話)		
343	JM061	<どこでも>{>} 行けちゃうってのは、結構大きなメリットか<なっ [↑]>{<}..
344	JF205	<確>{>} かに。
345	JM061	<て、思ってます>{<}。
346	JF205	<なんかデ>{>} パートとか..
347	JM061	うんー。
348	JF205	西武とか、あははは<軽い笑い>、いろいろ。
349	JF205	《沈黙1秒》すごいいいなー、って思います。
350	JM061	いや 、でも学生が東武、西武はそんな使わないと(あっ)<軽く笑いながら>お<もい‘思い’ますけどね>{<}。
351	JF205	<そうなんですね>{>}、えへへ<笑い>。

例3は母語話者同士による会話である。JF205は334行目で「でも「大学名1」とかだいいいですよね」という発話から、JM061の所属大学の立地(「地名1」)についてのほめを開始している。その後、JF205が346、348行目で「地名1」付近の建物をいくつか列挙してから、349行目で「すごいいいなー」とほめを明示的に産出している。これを聞き、JM061が350行目でまず「いや」と発し、直後に標識「でも」を使用し、評価された「大学の立地の良さ」という焦点を「学生がそんなに使わない」という側面にずらししている。つまり、ここで受け手は「いや」を利用して、ほめ発話に抵抗を示しつつ、ほめられた焦点を別の側面にずらすことで、ほめを受け入れているかどうかを明示せずに、直面しているほめのジレンマを巧みに解決していると考えられる。

このような回避型応答に用いられる「いや」は、ほめの受け手が「いや」を使用して、ほめに対する軽い抵抗を示している、またはほめと距離を置いていると言えるが、

否定まではしていない。また、形式としては、母語話者と学習者ともに、「いや」と逆接の標識「でも」を共起させて焦点をずらしたり、理由・説明の標識「ので」「だから」を共起させて客観的評価・説明を加えたりすることがよく見られた。ただし、母語話者の発話にのみ「どうでしょう」「わからない」のようにほめ手に聞き返したり、自身の知識が不十分であることを示して態度を保留する様子が観察された。

③肯定型

例4 学習者による控えめな同意（「I-JAS-JJC38」）

1	JJC38-I-01130-C	へーじゃ出てくるのは船じゃなくって、人なんですか？
2	JJC38-I-01140-K	はい人です
3	JJC38-I-01150-C	あ人なんだー
4	JJC38-I-01160-K	はい、でも名前はー、あの、日本戦艦の名前をついている
5	JJC38-I-01170-C	あーそうですね、元はー、船なんでもんね {笑}
6	JJC38-I-01180-K	はい、元ー {笑}、船
7	JJC38-I-01190-C	あそうなんだ、あたしそれ知りませんでした、初めて聞きました
8	JJC38-I-01200-K	やこれはちょっと難しいです {笑}
9	JJC38-I-01210-C	へーそうなんだ、ありがとうございます

学習者Kがアニメ「艦これ」について母語話者Cに説明している。KはCに、アニメの内容について「艦船が擬人化されていて、キャラクターにはすべて日本の戦艦の名前がついている」ことを説明している（2、4行目）。その後、Cは7行目で「あたしそれ知りませんでした、初めて聞きました」と、このアニメについて知識が欠如する状態を伝えいわゆる自己卑下する形で、間接的にKの知識状態をほめている。それに対して、Kは8行目で笑いながら「やこれはちょっと難しいです」とほめに控えめに同意している。この発話の組み立てを見ると、Kはまず音調の短めな「や」と発して抵抗を軽く示し、あるいはほめ行為と距離を置きつつ、直後に「これはちょっと難しい」という発話で「アニメの内容理解がCにとって難しいのは仕方がない（が私はよく知っている）」という意味で、ほめられた「アニメに関する知識状態」に控えめに同意している。次に、もう一つの肯定型の例を見てみる。

例5 母語話者による肯定的評価・説明（「I-JAS-JJJ49」）

209	JJJ49-I-02090-C	主役来たーみたいな感じになって
210	JJJ49-I-02100-K	そうそうそうそうそう
211	JJJ49-I-02110-C	あーそうだったんですねー、へー、すごい
212	JJJ49-I-02120-K	あ、いやいやいやいや、でもあれ、あれ以降ないですねそんなのは
213	JJJ49-I-02130-C	あそうですか〈はいはいはい〉、んーでも普通の人ないと思いますね、なんか芸能人だったら、いざ知らず〈あーあーあー〉、うーんやーやっぱりすごいと思う
214	JJJ49-I-02140-K	いやたぶんあん時あの会社のちょうど景気も良かったんじゃないですかね〈あー〉、それもあると思いますよ
215	JJJ49-I-02150-C	あー、うーん、なるほど、わかりました

例5の母語話者同士は「今までで一番楽しかった誕生日」という話題について話している。この断片の前で、Kは過去の自分の誕生日パーティーに仕事で遅れて行ったところ、パーティーがすでに盛り上がっていたと語っている。Cが211行目で「へーすごい」とパーティーの豪華さについてほめを行い、Kが212行目で「いや」を連続使用してほめを強く否定している。Kの否定応答に対して、Cは213行目で「ややっぱりすごいと思う」と再度ほめて主張を強めている。これを聞き、Kは214行目で「いやたぶんあの時の会社はちょうど景気も良かったんじゃないですかね」「それもあると思いますよ」という肯定的説明をしている。ここで、Kは「いや」を利用してほめと距離を置く態度を先に示しつつも、ほめられたものに関する肯定的説明を行うことで、ほめを受け入れている。このように、最初のほめ行為に対して受け手は「いや」を連続使用して強く否定する姿勢を示している（212行目）が、その後の再三のほめに対しては、受け手が「いや」による肯定型応答を産出する様子が見られた。

例4と例5が示すように、ほめの応答への「いや」は、ほめを否定するのではなく、あくまでほめ行為と距離を置くことを示すために利用されている。このような「いや」による肯定型応答では、母語話者と学習者ともに「いや」を用いつつポジティブな意味のことばの使用でほめを肯定することが多かった。ただし学習者は例4のようにほめを素直に受け入れる様子が見られたのに対し、母語話者の場合はことばの強さを和らげる「まあ」「たぶん」の付随が見られ、「ほめを肯定すると同時に控えめな」（昂 2022）態度が観察される場合もあった。

以上、ほめの応答に用いられる「いや」はどのように機能しているか、また「いや」で始まる応答にはどのような使用特徴が見られるかについて分析・考察を行った。次節では、ほめに対する「いや」で始まる応答の後続展開について分析を行う。

4.2 ほめに対する「いや」で始まる応答の後続展開

次の表4は、表3のうち、「受け手が主導する後続展開」についての集計結果である。表4を見ると、母語話者はほめに応答してから、様々な方法で後続話題を展開しており、その中で特に多用されたのは「語りの開始」（5件）と「話題転換」（5件）⁷⁾であった。それに対し、学習者が主導権を保ちつつ後続話題を展開する方法には「情報提供」（3件）と「語りの開始」（1件）のみ見られた。このように、多様な方略で後続の話題を展開している母語話者に比べ、学習者にはほめに応答してから主導権を保ちつつ話題を積極的に展開する姿勢があまり見られなかった。以下、母語話者に多用された「語りの開始」（例6）と「話題転換」（例8）、学習者に多用された「情報提供」（例7）の例を1つずつ挙げて分析を行う。

表 4 受け手主導の後続展開の下位分類の集計結果

後続展開	母語話者 (%)	学習者 (%)
語りの開始	5 (33.3%)	1 (25.0%)
先行語りの継続	1 (6.7%)	-
情報要求	2 (13.3%)	-
情報提供	2 (13.3%)	3 (75.0%)
話題転換	5 (33.3%)	-
合計	15 (100.0%)	4 (100.0%)

例 6 母語話者による「語りの開始」(「BTSJ-040-02」)

646	JF059	早く決めな、就職。	
647	JF060	ほんと。	
648	JF060	今受けようと思ってるところがさ、(うん) 3つぐらい、3つ?。	
649	JF059	へー、<すごいね>{<}<}	
650	JF060	<いや>{>}, 受けようと思ってる、と言いつつ、何にも、何にも行動してないんだからね。	
651	JF059	<笑い>。	
652	JF060	だから、受けようと思ってるっていうか、あの会社、あの、あそこ、あそこらへんいいなと思ってる会社が(あー) 3つぐらいあって。	語りの開始
653	JF059	あー。	
654	JF060	でもたぶんどれも全部難しくて、明らかに。	語り
655	JF060	しかも地元だからさー。	
656	JF060	なんか、ね、まだ何にも=。	
657	JF060	=しかも最近興味持ち始めたところだから<軽く笑う>,,	

例 6 は、母語話者同士が「就職活動」について話している場面である。JF060 が 648 行目で「今受けようと思ってる会社が 3 つぐらい」という現状を報告し、JF059 が 649 行目で「すごいね」とほめている。それに対し JF060 が 650 行目で「いや、受けようと思ってると言いつつ何にも行動してないんだからね」という「いや」による説明によってほめを回避している。それを聞き、JF059 が 651 行目で笑い声を発し、JF060 の応答内容を面白いものとして扱っていることを示しているが、主導権を獲得して話題を展開しようとはしていない。その次に、JF060 が 652 行目の冒頭で「だから」を置き、複数の発話 (652、654-657 行目) で詳しい語りを産出している。その語りを通して、JF060 が先行した応答内容「何にも行動していない」という自身の行動を正当化していると考えられる。このように、例 6 では受け手は「いや」を用いてほめを回避してから、後続展開で応答した内容を正当化するために語りを開始している。

例7 学習者による「情報提供」(「I-JAS-JJE07」)

1	JJE07-I-03160-K	町とが(とか)、〈うん〉、あ山とが(とか)、公園の、きれい	
2	JJE07-I-03170-C	でもそれは中国もきれいよ	
3	JJE07-I-03180-K	いいやいいや、きれいは旅行の場所はだけ	
4	JJE07-I-03190-C	あーそっかそっか、観光地だけ	
5	JJE07-I-03200-K	そう	
6	JJE07-I-03210-C	あそうなんだ	
7	JJE07-I-03220-K	でもー、ちょーど(ちょっと)日本のよりは、悪いね	情報提供
8	JJE07-I-03230-C	あーなるほどねー	
9	JJE07-I-03240-K	でも人はいっぱいね、それ	情報提供

母語話者Cと学習者Kが日本と中国の風景について話している。Cの「中国もきれい」(2行目)というほめ発話に対して、Kが「いいやいいや、きれいは旅行の場所はだけ」(3行目)という「いや」による自己卑下の発話を産出し、ほめを否定している。その後、ほめ手Cが「そっかそっか」「そうなんだ」(4、6行目)という相づちでKの応答を受け取っているが、話題をそれ以上展開しないことから、「ほめ－応答連鎖」がここで一旦収束可能に見える。だが、後続展開を見ると、Kが7行目で「でも」を用いつつ先行話題を再開し、「日本のよりは悪いね」「人はいっぱいね」とさらに中国の観光地に関するネガティブな情報を提供している。つまり、Kの7行目以降の発話は、ほめ談話の内容と関連付けつつ、ネガティブな情報を提供する形で後続話題を展開し、先行したほめ行為に対して否定的スタンスを維持していると考えられる。

例8 母語話者による「話題転換」(「BTSJ-027-02」)

339	JF033	あ、大学院なん<です>{<}>。	
340	JF034	<あ>{>}、さすがー。	
341	JF033	それもちっと、あの、不安で、最近不安な(あ)要素がたくさんあってほんと困って<笑いながら>。	
342	JF034	考えてらっしゃるから<笑いながら>。	
343	JF033	いやいや<笑いながら>。	
344	JF033	だから、ええ、就職活動はしてないです。	
345	JF034	あー。	
346	JF033	でも、就活終わったら、あと卒論だけですもんね。	話題転換
347	JF034	そうですねー。	
348	JF034	で、免許<2人笑い>。	

例8は母語話者同士が「就職活動」について話している場面である。JF033が339行目で「(大学卒業後の進路は)大学院なんですよー」と応答してから、341行目で最近の悩みを披露している。それに対しJF034が342行目で「考えてらっしゃるから」とほめを行い、JF033が343、344行目で「いやいや」「だから、ええ、就職活動はしてないです」と、「いやいや」で始まる客観的説明をすることでほめを回避している。それを聞きJF034が「あー」という軽い反応をしているが、主導権を獲得し話題を展開しようとする様子は見られなかった。その後、JF033が346行目の冒頭で話題を転換するための談話標識「でも」を用い「就活終わったら、あと卒論だけですもんね」と、

先行話題「就活」と関連付けつつ、巧みに「卒論」という話題に転換しようとしている。それを聞いたJF034も347行目で「そうですねー」という肯定的相づちを打ってから、348行目で「で、免許」ともう1つの新しい話題を提供することで、JF033による話題転換の試みに同調している。このように、例8では、受け手はほめに応答してから、後続展開で主導権を保ちつつ積極的に新しい話題を提供する形で話題を転換しようとし、ほめ手もそれに同調しさらにほかの話題を提供している様子が観察された。

以上、受け手がほめに対する「いや」で始まる応答を産出したあと、受け手が主導する後続展開の事例を示した。例6では、受け手はほめに応答してから、応答の内容を正当化するために詳しい語りを開始している。例7では、受け手は先行した応答の内容と関連付けつつ補足情報を提供する形で、後続話題を展開している。例8では、受け手はほめに応答してから話題転換を試みている。また、いずれの事例においても、ほめに対する応答が産出されたあと、ほめ手の反応が薄かったり沈黙が生じたりする際に、受け手は主導権を保ちつつ能動的に話題を展開していると考えられる。

5. まとめと今後の課題

本稿では、ほめに対する応答に用いられる「いや」の機能および後続展開について、談話・相互行為レベルで母語話者と学習者の比較分析を行った。

課題①に関しては、まず、ほめの応答に用いられる「いや」の機能は、ほめに対する軽めな抵抗、またはほめと距離を置くことを示しつつ、「いや」に続く発話によって、その応答がほめの否定なのか、あるいは回避や肯定、それらの複合なのかを明らかにした。「いや」による肯定型の例も見られたことから、ほめの応答に用いられる「いや」の機能は、否定だけではないことの根拠づけともなうと考えられる。また、「いや」で始まる応答の使用特徴について、母語話者と学習者ともに「いや」による否定型を最も多用している。ただし、母語話者は回避型を否定型とほぼ同数使用しているのに対して、学習者の使用は比較的少なかった（表3）。このように、母語話者は「いや」を用いた様々な応答方略で戦略的にほめに応答しているものの、学習者は「いや」による不同意以外の応答方略は少なく、場面や話題などの会話の諸要素に応じて柔軟にほめに対応する姿勢があまり見られなかった。

課題②に関しては、ほめに対する応答が産出されたあとの受け手主導の後続展開は、「語りの開始」「先行語りの継続」「情報要求」「情報提供」「話題転換」に分類できた（表4）。母語話者と学習者の使用特徴として、母語話者は様々な方法で後続の話題を展開しており、特に「語りの開始」のように、主導権を保ちつつ複数の順番で語りの詳細を産出するものが多かった。一方で学習者はほめ談話の内容に関連する「情報提供」が多く観察されたが、母語話者のように多様な方略で能動的に後続話題を展開する事例は少なかった。学習者にはほめに応答してから発話順番を保ちつつ話題を積極的に展開する姿勢が見られず、主導権を母語話者に譲っていることが推測できる。

本稿の分析結果から、日本語教育でどのような指導策がとれるかを検討したい。まず、学習者のわずかな例において、「いやいやそんなことないです」といった定型パターンが何例も観察されたため、教科書の影響をある程度受けている可能性があると考えられる。したがって、従来の認識のように「いや」はほめに対する否定の提示だけでなく、「いや」による回避型応答（「焦点ずらし」や「態度の保留」）、肯定型応答（「控えめな同意」や「肯定的評価・説明」）のような多様な応答方略を提示する必要がある。また、応答方略を提案する際に、「いや」による「焦点ずらし」は「いや」＋「でも」、「いや」による「評価・説明」は「いや」＋「(だ) から」/「ので」など、言語形式の共起パターンを示すことも同時に提案したい。また、後続展開の様々なパターンも学習者に提示する必要があるだろう。例えば、先行したほめ談話の内容と関連付けつつ語りを開始または継続することや、緩やかに話題を転換することなどの方略の提示は、学習者がほめに柔軟に対応しつつ能動的に談話を展開することが可能となり、談話展開能力の育成にもつながると期待される。今回は、ほめの応答位置に出現する「いや」に着目したが、今後はほめ以外の行為にも着目し、「いや」の機能について分析したい。

注

- 1) 本稿では、ほめの談話構造の区分を明確に定義している金（2012）に従って分析を行う。ただし、「ほめ－応答連鎖」と「後続連鎖」の2つの用語における「連鎖」の概念を区別するため、「後続連鎖」を「後続展開」と称することとする。
- 2) 「BTSJ」の会話データは会話参加者の性別や親疎関係などの会話条件がすべて統制されている。「I-JAS」の対話タスクは、調査実施者と協力者が様々な話題について30分程度話している自然会話である。
- 3) 表1、表2の例は本データから抽出し、簡潔に示すために調整を加えたものである。
- 4) 複合型応答の下位分類について、金（2012）は「否定→否定」、「回避→回避」、「肯定→肯定」といった応答の方向性に変化が生じないものも扱っているが、本稿は応答の方向性に変化が生じるものを複合型応答として認定するため、「否定→肯定」や「肯定→回避」などのパターンのみを分析対象とする。
- 5) ここでいう総発話数とは、話者交替や間などの要素を考慮したうえで、1人の話者による1ターンの総数を指す。
- 6) 教科書の1例を示す：「小川：シルバさん、日本語うまくなったね。シルバ：そんなことありません。まだまだです。」（『現代日本語コース中級Ⅱ』）
- 7) 「話題転換」には、受け手はほめに応答してから、後続展開で話題を転換するものと、本連鎖におけるほめの応答位置で話題を転換するものの2種類が含まれる。

参考文献

- 昂燕妮 (2022) 「『ほめに対する応答』の日中対照分析—親疎関係に焦点をあてて—」『小出記念日本語教育研究会論文集』30、25-40
- 池田真希子 (2008) 「『ほめ』に関する研究—日本語学習者のほめの返答—」『東京女子大学 言語文化研究』17、1-15
- 宇佐美まゆみ監修 (2023) 『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス』、科研基盤研究 (A) 「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」(研究代表者: 宇佐美まゆみ) 及び、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(2016～2021)
- 金庚芬 (2012) 『日本語と韓国語の『ほめ』に関する対照研究』ひつじ書房
- 串田秀也 (2005) 「『いや』のコミュニケーション学」『月刊言語』34 (11)、44-51
- 串田秀也・林誠 (2015) 「WH 質問への抵抗—感動詞『いや』の相互行為上の働き—」『感動詞の言語学』ひつじ書房
- 迫田久美子 (2020) 「I-JAS 誕生の経緯」迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬 (編著) 『日本語学習者コーパス I-JAS 入門—研究・教育にどう使うか—』(pp.2-13) くろしお出版
- 高宮優実 (2022) 「自然会話コーパスに見られるほめへの応答—『ほめられたら謙遜する』という定説を再考する—」『ことば』43、111-128
- 張承姫 (2014) 「相互行為としてのほめとほめの応答—聞き手の焦点ずらしの応答に注目して—」『社会言語科学』17 (1)、98-113
- 趙文騰 (2023) 「ほめが否定された後のほめ側の行動—会話分析の手法とフェイスの概念を用いて—」『社会言語科学』26 (1)、213-227
- 永田良太 (2016) 「日本語母語話者と日本語学習者の接触談話における『ほめ』—中国語を母語とする上級日本語学習者を対象として—」『語文と教育』30、139-150
- 名古屋大学日本語教育研究グループ (1990) 『現代日本語コース中級Ⅱ』名古屋大学出版会
- 彭津 (2023) 「話し言葉における談話標識『いや』の使用—日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較から—」日本語教育学会 2023 年度秋季大会予稿集、215-220
- 山根智恵 (2003) 「談話における『いや』の用法」『岡大國文論考』31、136-145
- Pomerantz, A. (1978). Compliments responses: Notes on the co-operation of multiple constraints. In J. Schenkein (Ed.), *Studies in the organization of conversational interaction* (pp.115-132). New York: Academic Press.

使用コーパス

- 『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス』 <https://mmsrv.ninjal.ac.jp/btsj/>
- 『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』 <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lsaj/ihome2.html>
- (いずれも 2024 年 12 月 24 日確認)